

2020年 コロナ禍で学生はメディアとどう付き合ったのか

鈴木 裕美子^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【抄録】

2020年春。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い新しい事態が次々おきて、人々はその都度対応を余儀なくされ、様々な情報に翻弄されました。一年前と世界は全く違うものになりました。全国一斉休校、緊急事態宣言… オンライン授業。学生たちはコロナ禍の中、メディアとどのようにつきあったのか…。メディア論を担当した立場から記録として残す必要があると感じています。授業が進むにつれて学生たちがどう変化したのかも含め、紀要の場を借りてメディア論的に半期の授業を振り返ります。

【キーワード】

メディア、テレビ、SNS、言論の自由、Z世代

2020年の春は学校・学生にとっても初めての事ばかりで戸惑うばかりだったのではないのでしょうか。私は『メディア論A』を担当しておりますので、コロナ禍における学生たちの「メディアとの付き合い方」について記録します。

本学のリベラルアーツ科目のメディア論の講座では「メディア¹という切り口で社会を見て、社会的課題を解決する」という目標を掲げています。学生にはその為に大切なのは「自分の言葉で自分の意見を言えるようになる。同時に人の話にも耳を傾けること」と伝えています。

今期は、まさにメディアを学ぶにふさわしい時間でした。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い新しい事態が次々おきて、人々はその都度対応を余儀なくされ、様々な情報に翻弄されました。一

年前と今では世界は全く違うものになりました。

私の本務はテレビ局²で報道討論番組を制作することです。本稿ではメディアに在籍する立場も加味し2020年春から夏への動きを追いながら、学生たちの変化も含めて記述します。

さて、まずは、2020年度の前期始業までの状況を振り返り、学生の置かれていた時間軸を少し戻します。

1. 授業が始まるまで～コロナ禍の始まりと一斉休校～

2019年12月、中国の武漢で新型コロナウイルスが発生します。武漢在住の医師が警告を鳴らしたにもかかわらず秩序を乱すという理由で、その医師は逮捕されのちに感染により死亡します。この間あつという間に感染が拡大。2020年1月20

<連絡先>

鈴木 裕美子 suzukiy2@tv-asahi.co.jp

日、中国は初めて新型肺炎の感染拡大を公式に認めます。そして武漢を突然閉鎖します。

日本では1月15日に初めて感染者が確認されます。日本政府は1月30日に内閣に新型コロナウイルス感染症対策本部を設置。30日WHOのテドロス事務局長は緊急事態を宣言しました。

2月初旬、新型コロナウイルスに感染した人がダイヤモンドプリンセス号に乗船していたことが発覚し横浜港で長期検疫体制に入りました。感染者は増え続け、連日報道されました。

全国的な感染拡大の中で2月27日、安倍晋三総理大臣は3月2日から小中高校等の臨時休校を要請します。(具体的には、27日の政府コロナ対策本部で総理から小中高で全国一斉の臨時休業を要請する方針が示され、28日に文科省から小中高特別支援学校に対して、3月2日から春休み前まで全国一斉の臨時休業を要請する通知を出した。)

これまではインフルエンザの流行で地方自治体ごとに、学級閉鎖や学校閉鎖をすることはあったとしても、全国一斉休校は全く初めてのことでした。年度末年度の初め、卒業と入学のシーズンの中“学校生活”はほぼ止まることになってしまいました。児童・生徒・学生たちにとっては、一生に一度きりの卒業式や入学式を体験することができず、卒業生たちは同窓生と全く会えないままに学校を離れることになってしまいました。全国一斉休校の要請で児童・生徒・学生の生活は一変します。一斉休校は、子供は学校に行くのが当たり前として家庭生活が営まれていた多くの家族や日本人の生活に大混乱をもたらしました。

同時に、かつてない要請を発出することで、国民に対し「緊急事態であること」を認識させ自粛という行動変容を促すこととなります。後に、この安倍総理の決断は、事前に文部大臣にも相談しなかったことが判明します。³

3月11日 WHOが「パンデミック(世界的大流

行)」を宣言。

3月24日 東京五輪・パラリンピックが延期されることが発表されました。

3月29日 国民的な人気者、コメディアン志村けんさん(70歳)が新型コロナウイルス感染症に伴う肺炎で亡くなりました。

4月7日 政府によって「緊急事態宣言」が発出され、不要不急の外出の自粛が要請されることになりました。政府が感染症に関する緊急事態宣言を出したのは、初めてのことでした。安倍首相は「海外で見られるような都市封鎖を行うものではなく、公共交通機関など必要な経済社会サービスは可能な限り維持しながら、密閉、密集、密接の3つの密を防ぐことによって、感染拡大を阻止していく」と強調しました。(5月25日全国で全面解除)。

自粛中は、感染症の恐ろしさも、人々の生活上の問題も、経済活動の停止も、休校も国民全体に重くのしかかってきました。「アベノマスク」「トイレットペーパー品切れデマ」「特別定額給付金」「コロナ派遣切り」「PCR検査」…。新しい言葉、新しい事態が次々におきます。安倍首相が専門家会議とともに記者会見はその都度テレビ中継され、人々は息をのむように見守りました。

4月23日 俳優で司会者として活躍した岡江久美子さん(63歳)が亡くなりました。ご家族は感染予防のため火葬にも付き添うこともかなわず、ご遺骨は、マスクと手袋の葬儀社の人のご遺骨の入った箱と花束をご自宅の玄関前に置く、という異例の形で、ご家族に届けられました。午後の情報番組の時間帯だったこともあり、テレビカメラでその一部始終が放映されました。この映像は感染症の恐ろしさを生々しく伝え、視聴者に大きな衝撃を与えました。元気で明るい日本のお母さんとして愛された岡江さんと、そのお別れのあまりにも淋しい様子との落差は、視聴者にかなりの危

機感をもたらしました。⁴

当日の東京都の会見では、小池百合子都知事が冒頭で「本日の(都内の)感染者数は合計して134名、亡くなった方は6名、その中には女優の岡江久美子さんが含まれているというとても残念なお知らせでございます。」と述べています。

この間、2020年度がいつ始まるのか、学校側も学生も状況を確認する日々でした。

多くの大学では4月から授業は始まらず、5月の連休明けになり初めての授業が行われ、その多くはリモートによるものでした。学校を運営する教育関係者も、また、学生も、自粛期間中様々なメディアから情報をとりつつ、自分たちの行動を決めていたはずです。

授業がスタートした連休明けというのは、改正著作権法第35条が4月28日に前倒しして施行されたことで、非営利目的の教育機関が行う遠隔授業において許諾なしに著作物を使用できるようになったタイミングでした。⁵

私の担当する授業も5月12日に始まり、初めての授業はZoomで行う事になりました。

2. 私の学生たち～2年生はZ世代～

メディア論の受講生2年生はほぼ19歳から20歳。21世紀生まれもいます。Z世代と呼ばれる若者たちです。

その上の世代(1980年代以降に生まれ2000年代に成人を迎えた世代)はミレニアル世代と呼ばれ「SNSを使いこなすことによって世界中とつながり、社会貢献意識が高い、旧世代のように既存の価値観に縛られない」と言われています。

1995年日本ではインターネット元年を迎え、携帯電話もすでに普及していました。ミレニアル世代が成人を迎えた2000年代は情報量が飛躍的に増えた時期です。2001年4月の小泉純一郎政権の

発足当時、日本はITバブルか、と言われていましたし、この時代の若者の憧れは、IT界で活躍する実業家のホリエモンこと堀江貴文さん(1972年生)、Twitterを日本で初めて使ったとされるジャーナリストの津田大介さん(1973年生)、評論家・哲学者で後にゲンロン・カフェを主宰する東浩紀さん(1971年生)でした。

テレビ局は地上デジタル化をすすめ、Twitterの日本語版、Facebookの日本語版のサービス開始は2008年です。スマートフォンも2009年に発売されました。

2001年(平成13年)を基準とし、情報の供給量と消費量を比較した研究がありますが、8年後の2009年(平成21年)には供給量は消費量のおよそ8倍となり、大量に情報が氾濫する一方で、情報消費量がそれに伴っていないことがわかります。⁶

さらにまた、2010年から2、3年で一気にスマートフォンが普及します。2011年東日本大震災が起きた当時、被災地では「電話が通じなくても、TVが見られなくなっても、新聞が来なくなっても、ネットは利用できた、ショートメールだけは生きていた」という話が多く聞かれました。

当時、私は他大学⁷で2～4年生を対象とする教養講座(本学で言うリベラルアーツ)で、『放送番組論』を担当しておりました(2009年度～13年度)。

2011年度最初の授業では「東日本大震災3.11当時あなたは何をしていたのか、あなたは震災の情報をどのように得たのか」などを話し合う事としました。震災の経験は学生たちにとって衝撃的で、新学期になっても不安な様子を見せる学生が多くいました。恐ろしかった経験を抱えすぎてもいけない、話したくないものを無理に話させてもいけない…。そんなバランスの中でスタートした授業でしたが、結果的に、震災時どんなメディア

に頼ったのか、思い思いに話してくれました。家族の安否確認、交通情報、福島第一原発の事故の情報、被災地の状況…。

家族の安否は先ず電話で。亡くなった方のお名前を新聞で確認した学生もいました。この時代には少数ではあるもの、新聞を自ら手にとって読む学生もいました。速報ニュースや大きい情報はテレビで。「テレビは、津波の映像が流れるので怖くて見ることができなくなってしまった」という学生もいました。

地域やライフラインに関する情報はインターネットで調べた学生が多くいました。各自治体が出す情報、被災した人が発信する情報などはTwitterなどのSNSから得ていました。テレビ局も震災当時は、テレビだけではなく、インターネットニュースを通じて被災者情報・救援物資情報・交通情報などを積極的に発信していました。当時始まったばかりの、ラジオをインターネットで聴取できるサービス、radikoを利用した学生もいました。

インターネット経由でテレビ局から発信される情報を得たり、radikoを利用することができたのは、日本では2000年代に官民挙げて地上デジタル化を推進した成果で、東日本大震災の時に役立ったのです。

あれから10年、比較するまでもなく膨大な情報の中で育ってきたのが、Z世代なのです。そんな彼らが、就職活動を控えた春に緊急事態宣言が発出され、コロナ禍に巻き込まれていくことになったのです。

3. 授業が始まった！～学生たちの関心は～

私のクラスの受講生は男女合わせて22人。起業したくてマーケティングの勉強に熱心な人、ジャーナリズム志向の高い人、ファッション写真

をInstagramにあげるのに夢中人、本学のリベラルアーツは学科を超えて集まってくるので興味の幅が広いのが特徴です。とはいえ、これは授業が半ばまで進んでやっとわかった情報です。

さて、計15回のうち11回はZoomによるリモート授業で、対面授業は8月に入り学内での補講期間に2コマ2回連続で2日間行いました。シラバスに従いながら、その時の社会の動き、時事的なテーマをトピックとして解説しながら、メディアについての理解を深めてもらおうというものです。

初めての授業では、開始前、回線がつながるか双方向が可能か、緊張しました。学生に音読してもらおうと、資料は国立公文書館が保存している原稿のコピー（日本国憲法の前文、「表現の自由」を保障した第21条）を共有フォルダーに収めました。

授業では、3.11の時と同じように自己紹介がてら「緊急事態宣言の自粛下であなたが付き合ったメディアについて」各自に話してもらいました。また、中国では当初新型コロナウイルス感染症について報道がなされなかったことなど、国や時代によってメディアやジャーナリズムのあり方が異なることなどを説明、手探りで始まったオンライン授業でした。

以下、授業の中で学生が興味を持った2020年ならではのトピックをあげます。

関心は3つに集約されます。ネットいじめとBLMと「みんな大好き！YouTube」です。

関心その1～“ネットいじめ”はいやだ！～

5月23日、フジテレビの恋愛リアリティ番組「TERRACE HOUSE（テラスハウス）TOKYO2019-2020」（フジテレビ・Netflix）に出演していたプロレスラーの木村花さん（22歳）が

会員交流サイトで誹謗中傷された後亡くなりました。⁸

このインターネット上のいじめに対し、学生は衝撃を受けていました。「言葉は人を殺す」という言葉を文字通り実感した発言が相次ぎました。

この木村さんのニュースをめぐっては、Yahoo!は、投稿コメント欄に以下のような注意書きを記しました。

「『表現の自由』は無制限ではありません。法令に違反するコメントや、誰かを著しく傷つけたり、攻撃したりするようなコメントの投稿は、Yahoo!利用規約およびYahoo!ニュースコメントポリシーで禁止しています。投稿前にご確認ください。」

実際に文章として投稿欄のトップにこの注意書きが載せられると、感情に任せて思ったことを投稿することを思いとどまらせる効果があるのではないか、と、多くの学生が賛同しました。

一方、木村さんの件は授業以外つまり学校の外では、別の論点に注目が集まっていました。

「木村さんが出演した番組は、リアリティ番組とはいいつつも、完全なドキュメンタリーではなく、制作者側が設定した場の中での行動であること」「あたかも木村さんという個人が番組の中の登場人物と同じ人格であるなど錯覚させた番組の作り方自体が問題だ」と指摘する声が多く聞かれたのです。木村さんの死去を受け、フジテレビは5月27日、テラスハウスの制作・放送を打ち切ると発表しています。

放送倫理・番組向上機構（BPO）⁹は、人権侵害があったとする木村さんの母親の響子さんからの申し立てを受け、9月に審理入りを決め、2021年1月現在継続中です。

しかし、授業の中では学生がテレビ番組そのものに疑問符を投げかける場面はなく、専ら“ネットいじめ”の恐怖に関心を寄せていた事が印象的

でした。この事件は、毎週の授業の中でも期末試験のレポートの中でも、学生の関心の中心を占めていました。

関心その2～世界的なBLM運動・人種差別について考えてみたら～

5月25日、アメリカで黒人男性ジョージ・フロイドさんが警官により押さえつけられた映像はSNS上に上げられ、瞬時に世界中を駆け巡りました。

その後のBLM（BLACK LIVES MATTER）運動への共感もまた、授業のスタートから期末テスト終了まで絶えず学生たちの関心を集め続けました。アメリカで、世界で、BLM運動が若者によって支持され長く続いたのはSNSで情報が流れたことがその理由ではないか、と分析する記事が多く見られましたが、私のクラスでも全く同じでした。

普段、人種差別に敏感ではない若者たちにとって、フロイドさん暴行の映像のショックから続くデモの参加者による映像などが次々にアップされ、その都度、学生たちは敏感に反応しました。

ほとんどが日本で生まれ育った彼らにとって、このニュースに接するまでは「人種差別」は全くの他人ごとの様でした。同じ神奈川県の川崎市でヘイトスピーチ禁止条例が制定されたニュースや、高校で世界史を学び、映画や小説などで、人種差別が存在することを知る機会があったのではないか、と思いましたが、彼らにとって身近なメディア（ネット）から、映像と共にBLM運動の情報を得ることで、リアルに「人種差別」や「人権」を考えるきっかけになったことは大きな意義がありました。

…学生のひとりが、『『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（The Real British Secondary School Days）¹⁰を読みました。差別について、考

えさせられました」と授業後メールを送ってくれましたので、学生たちに紹介しました。

そんな中、BLM運動をめぐってアメリカ国内でデモ隊が警官と衝突するなど混乱が起きつつある中、ドナルド・トランプ大統領が「暴力」をにおわせる発言をTwitter上に上げた際にトランプ大統領のコメントに対し、アメリカのTwitter社が「暴力的な内容が含まれている」と注意喚起のフラッグをたてました。

これに対し、学生たちの意見は2分。「大統領の発言はもともと政治的な意味合いがあるのだから、注意書きなどを載せるべきではない」「デモを阻止するためには軍隊を出すこともいとわぬ、という発言は、暴動化するデモへの抑止力になるので、Twitter社が注意書きを出すこと自体がおかしい」という考え方と「誰であれ、暴力を肯定するような発言への注意は当たり前だ」という考え方です。

「トランプ大統領を支持するかしらないかではなく、この問題は、誰かの発言をだれが責任を負うか、が、問題なのです」という声も。投稿内容について注意喚起のフラッグを立てることは、実質の検閲にあたるのではないか、という疑問もありました。¹¹

交流サイトのサービスの提供者、プラットフォームがどこまで発言に関与するのか、関与すべきかすべきでないのか、学生は、この課題をまるで自分自身の問題のように考える機会になりました。

米国ではこれまで、インターネット企業には第三者によって提供されたコンテンツに対して、一部の例外を除き法的責任を問わないという考え方があったのです。それは、インターネットというものが出現した当初、コンテンツに関する訴訟が乱発し生まれたばかりのインターネット企業に膨大な負担がかかって企業の成長が阻害される恐れ

があったため、産業を育成する目的で「プラットフォーム・プロバイダー責任制限法」が生まれたという背景があるのです。(…日本では、「特定電気通信役務提供者の損害賠償責任の制限及び発信者情報の開示に関する法律」)

トランプ大統領の「暴力を示唆する発言」に対するTwitter社のこの対応については、学生の賛否が分かれていましたが、木村花さんのケースのような、いじめや誹謗中傷のような投稿はチェックする責任があるのではないか、という声が多く上がりました。

私からは補足として、新聞やテレビなど報道機関の場合は、取材者の上にデスクがいて、原稿や記事の内容などは、事実誤認がないか、表現方法に倫理的配慮がされているのかなど、何重にもチェックされ出稿されていることを説明しました。

インターネットは個人が自由に発信できるメディアですが、そこには、「表現の自由」と「発言の責任」をめぐることがあることを考える授業となりました。

また、学生はBLM運動の広がりを通じて、映画やTV番組、芸術作品も、時代によって評価が異なることを知りました。ちょうどこの時期、南北戦争中、激動の時代を生き抜く女性を主人公にした、不朽の名作として映画史上に輝く『風と共に去りぬ』も「人種差別」の批判の対象になっていることが報じられ、学生は「時代とメディア」についても学ぶことになったのです。¹²

関心その3～YouTube大好き!…でも、テレビニュースを信頼してメディア選別～

(1) 娯楽としてのメディア

自粛期間中、一人暮らしで「学校にも行けない、友達とも会えない、アルバイトにも行けない」学生もクラスにいましたが、テレビを見たり、インターネット(SNS、Netflix)を見たり本を読ん

だりして、孤独を埋めているのが良くわかりました。彼らは、友達と会えない中、LINEでやり取りしたり、Instagramをあげたり、TikTokで仲間と「つながって」いました。

特に多くが自粛期間中に「大好き！」で「夢中になっていた」のは、動画共有サービスYouTubeで見る楽しい映像でした。韓国のアイドルが好きなある学生はYouTubeの世界にどっぷりつかり、この機会に韓国語を学んだということでした。

エンターテインメント界では、自粛期間中、観客に映画館や劇場に足を運んでももらえないので、制作者側も様々な工夫を凝らしてYouTubeに作品をあげていました。…例えば、授業開始の頃、5月には、映画『カメラを止めるな！』¹³の上田慎一郎監督は、『カメラを止めるな！リモート大作戦』をYouTubeに挙げ評判になっていました。学生は豊富なコンテンツあふれる「YouTubeが大好き！」で、多くの時間をYouTube視聴に費やしていたようです。

また、この期間に、初めてラジオを聞いて「ラジオの親密性が好きになった」という学生もいました。この学生は、自分の耳元に誰かが語り掛けてくるという状況に、親密さを感じたのでしょうか。

ラジオ放送は、戦前の日本において新聞とならぶマスメディアでした。ラジオを家族が囲む茶間の様子も写真に記録されています。その後1955年に、ソニーがトランジスタラジオを発売、ラジオは携帯可能な小型なものとなり、ラジオはより個人的なパーソナルなメディアへと変化します。受信機というハードが小型化を遂げることで、ラジオ番組つまりソフト・コンテンツもパーソナルな内容に変化して行ったのです。これにより、深夜放送、若者文化を生み出し、社会に新しい価値観を生み出していきます。

本学は、もともとソニーの教育方針により建学

されています。ラジオについて学びながら、学生は世界中の人々の意識や行動を変えるような発明をした企業が母体となる学校に在籍していることをあらためて知ったことになります。(1979年ソニーのウォークマンの発売によって、音楽もよりパーソナルなものになりました。)

また、ラジオをインターネットで聞いた学生もいました。

「自分の郷里の放送を聞きたくて、インターネット同時配信サービス、radiko.jpを聞いた」そうです。緊急事態宣言下、帰りたくても実家には帰れない状況が続き、淋しかったのでしょうか。前述した通りradikoは東日本大震災前後に各地でサービスを順次開始、今では全国99のラジオ局が参加し、日本中を網羅しています。

テレビ局は3月以降、感染拡大防止のため、収録ができない、取材ができないなどの理由から再放送、総集編などを流し、番組制作の中断のためシリーズものの時期がずれていく、など、通常とは全く違う放送が続いていました。学生は「それはそれ」とテレビの放送を楽しんでいるようでした。

家族と一緒に生活していた学生にとっても、若い彼らにとってこの閉塞感はずらいものだったに違いありませんが、様々なメディアを使いこなしながら自粛期間を乗り切っていました。

(2) 情報を得るためのメディア

コロナに関する情報は、ほぼ全員がインターネットやテレビのニュースから情報を得ていました。

「YouTubeは投稿者がコンパクトに動画をあげているので見やすい」といい、「Twitterには様々な情報があがるのでよく見ていた」といいます。

しかし、ある学生はコロナ情報を知りたくて「世界中の人がリアルタイムで発信しているのだから主にTwitterから情報を得ていたものの、『いいね』や

『リツイート』がほしくて嘘の情報を流している人もいて、そういった情報に騙されないようにするために他のメディアと比べたり、自分で分析した」といいます。

インターネット上の嘘、デマに関しては、学生は異常ともいえるぐらいに敏感です。インターネットの課題としてあげられる筆頭に発信者の「匿名性」がありますが、匿名だからこそ自由に意見が言えるという反面、匿名だから悪意のあるデマや不確かな情報を流すこともできる、という指摘があります。

Facebookはその成り立ちから会員には実名登録を求めています。ほとんどの交流サイトは、匿名での投稿が可能です。特に日本においては、他国に比べて、匿名の比率が高いことがかねてから指摘されています。¹⁴

しかし、コロナ禍にあって、人々は正しい情報をもとに行動したい、と考えています。匿名の情報に踊らされないことがないように身構えているのです。学生はインターネットでコロナ関連の情報を得る際には「情報の出どころは?」「誰がニュースを伝えているのか」などをチェックしていました。

ある学生は「YouTube上のANN news CH¹⁵が字幕付き動画なのでわかりやすいし、テレビ局から発信されているニュースなので信頼がおける」のでよく見たそうです。

この学生は、自覚的に「発信者の身元が明らかなものを信頼」し、自分なりに「発信者に信頼がおけるかどうか」を吟味して情報を選択していました。嘘、デマ、誤報を避けるための模索、自己防衛のために、自然に情報を選択する能力、“受け手”としてのメディアリテラシーが身についたこととなります。

さて、この「テレビでニュースを見るのではなく、インターネット上でテレビのニュースを見る」

という視聴行動が定着しつつあるのは、テレビ局などの報道機関がニュースのクロスメディア展開に力を注いでいることが背景にあります。例えば、テレビ朝日のニュースは、地上波、テレ朝 news、ABEMAnews、Twitter、YouTube、BS朝日など様々なチャンネルで発信されています。

2019年に日本の広告費でそれまで長く王座を占めていたテレビ広告費が、初めてインターネット広告費に抜かれ、テレビ各局はクロスメディア展開を余儀なくされているのです。もちろんドラマやバラエティなど娯楽番組も様々に展開していますが、ニュースは生活必需品、より早的確に人々のもに届ける必要があります。インターネット展開に力を入れているのです。

「人々はネットを利用し、テレビを信頼している」という2020年(令和2年)の総務省のメディアの重要度・信頼度調査¹⁶があります。この学生はまさにその結果と符合する行動をとっていました。

一方、この時期、Twitter上では、「#検察長法改正案に抗議します」¹⁷が大きくなるとなりましたが、関心を示す学生はほほいかなかったようです。

最も盛り上がったのは、5月10日。授業開始の頃です。外国の事ながらBLMは悲惨な映像がついていることもあり理解しやすい情報で、若者の心をつかみました。また、コロナの感染情報や生活情報は知りたかったものの、日本国内の、政治の、しかも#のタイトルが「法律」をさしていて難しく、政治参加をしていない学生たちには遠い出来事だったのかもしれない。…これも総務省の調査ですが、SNSは日本では「身近な話題」「身近な人たちの交流」には使われますが、「政治的な関心」「政治行動」などに利用されることは、諸外国に比べて低いという結果があります。

そして、新聞について…。

家族と同居していても新聞を取っていない家もあり、学生はコロナの情報を得ることはおろか、全くとは言いませんが、ほとんどが新聞を読んでいませんでした。

若者には読まれなくなってしまった新聞ですが、新聞は報道機関として日本社会の屋台骨を支える重要な役割を担っています。明治時代以降、いくつもの戦争を挟んで、新聞社にも様々な時代がありました。しかし、新聞は、言葉の力で、常にその時々日本社会を活写してきましたし、その歴史や知恵や知見は国民の財産と言えます。

私が特に注目するのは、全国紙と呼ばれる新聞社はひとつの組織として日本中を網羅していることです。NHKを除き、テレビ局は、在京キー局を中心とする系列局という別会社の集合体でニュースネットワークを形成しています。しかし、新聞社の場合は、若い記者たちは転勤を重ねながら、デスクへと育っていきます。彼らは日本の隅々まで赴き、様々な取材活動を通じて、日本各地の美しい風習や矛盾など、良いところも悪いところも含めて日本社会を学んでいくのです。時間的空間的に日本を俯瞰できる記者を育てるシステムがあるのです。そして、その知恵が集約されて紙面が作られていきます。

上述したように、広告収入は今やインターネットが王座を占めており、新聞は苦しい戦いを強いられています。歴史的な背景から、長い間、新聞社はテレビ局の親会社として君臨してきましたが、今はその勢いもありません。確かに、新聞には、速報性、わかりやすさ等は、テレビやインターネットに追いつけない部分もありますが、何重にも推敲された記事や、記事の大小でニュースの重みを伝える手法、過去の積み上げから滲む見識は、新聞の魅力です。特に、調査・検証報道は、世の中の流れを一気に変えるほどの強さがあります。

もちろん、新聞社もインターネット展開をして

います。ニュースを熱心に追いかけていた学生は「ネットで新聞記事を読んだ。新聞だから間違いないだろうと思った」と新聞を評価し、また、別の学生は「授業を受けてみて、これからは新聞を読んでみよう思う」という感想を寄せました。

それにしても、学生たちが関心を寄せたテーマは、すべて「SNS」からの情報でした。

4. オンラインでグループワーク 「他己紹介」と「メディア・パズル」

1. グループワークの前に声を出す

オンライン授業の前半は、私の講義や学生とのやり取り、資料の音読とその解説などが中心となりました。オンラインでも参加型の授業にしたいと考えて、学生に発言を促しても、学生は恥ずかしくて声を出しません。「質問はありませんか?」「・・・」。

それならば、授業の度せめて一回は声を出してもらおう、と考えました。一般に、社会に対して意見を言うことを「声をあげる」「モノ申す」と言いますが、同席者の中で自分の存在を明らかにするためには、まず「声を出す」ことがその一歩となります。「皆の前で意見を言うことは恥ずかしくても、人の書いた文章なら読めるでしょう」と、資料の音読をお願いしました。小学校以来おそらく音読の機会はなかったのでしょうか。もじもじと、か細い声で文字をひろうばかりで、人に聞かせようという気は微塵もなく、その上、難しい漢字は読めるのに意外に簡単な漢字が読めない、などということがありました。

「社会に出て漢字が読めなければ困りますが、授業中に間違えることは恥ずかしいことではありません。読めるようになった方が良いので声に出して読んでみましょう。」と言いつづけていると、面白いもので、人前で恥をかきたくないという一

心から学生は事前に配布した資料には目を通して読み方をチェックするようになります。「知らない字が読めるようになって、良かった」という感想を寄せた学生もいました。

しかし、学生自ら参加し考える形のグループワークを是非実践したかったので、2つのグループワークを行いました。「他己紹介」と「メディア・パズル」です。

まず、前期授業も半ばを過ぎた頃、Zoomのグループ機能を使って2人一組になり他己紹介をしました。キャンパスライフがなかった学生にとって、このグループワークは楽しい時間になったようです。

2. グループワーク (1) 「他己紹介」

- ① AさんとBさんの2人組で、まず、Aさんが自己紹介を1分。
- ② その後、①を受けて、BさんがAさんに1分間質問する。
- ③ その後、役割を変えて同じことをする。
- ④ そして、AさんがBさんのことを紹介するために、BさんがAさんを伝えるために、1分間、情報を整理する時間をとる。以上、計5分
- ⑤ 全員の前で、AさんがBさんを1分間で紹介、BさんがAさんを紹介。つまり他己紹介する。

メディア論の観点からは、①は「意見を述べる(情報提示)」②は「情報を取材する」④は「情報を整理・構成する」⑤は「伝える・表現する」という作業になります。

「すべての情報は、選択され切り取られ、整理され、構成され、表出される」。

他愛もないお遊びのように見える他己紹介は、番組制作の流れと合致しています。

「テレビ番組ではインタビュアーが出演者に話を聞き、映像と音声を収録し、視聴者にわかりやすいように内容を構成し、例えば、面白いエピソード

を最初に持ってくる等の工夫をして、VTRの編集作業を経て、放送に至るのです。」他己紹介後、こう説明すると、学生たちは取材からの発表までの流れを意識するようになりました。

しかし、この時の他己紹介は、ほとんどが「この人はどこの誰それ。クラスは…部活は…アルバイトは…趣味はYouTubeを見ること」に集約され、第三者に対し、紹介する人を魅力的に表現しているものでありませんでした。学生同士がお互いを知るには部活やバイトの情報は大切ですが、それだけでは、誰かを紹介したことにはなりません。とはいえ、抜群に上手な学生が数人いて、心底驚きましたが…。

3. グループワーク (2) 「メディア・パズル」

(1) その前に…

「メディア・パズル」の前身ともいえるべき「テレビ・パズル」を紹介します。

日本でテレビが産声を上げたのは戦後のことです。すでに1926年、高柳健次郎はブラウン管に「イ」の字を映し出すことに成功、テレビの研究は進むかと思いましたが、戦争で中断。

テレビ放送が始まったのは1953年。1月にNHK東京テレビ局が、8月に日本テレビが放送を開始しました。戦後の復興期を日本社会と共に歩んだテレビは、社会の公器として人々の生活に密着してきました。しかし、2000年代に人間で言えば50代を迎えたテレビ局は、テレビの原点とは何か考え直し、民放連でも10年に及ぶメディアリテラシー・プロジェクトを行いました。¹⁸ 同じ時期にアナログ放送から地上デジタルへの転換・推進活動が行われています。

テレビ朝日では創立50周年記念事業として、東京大学大学院情報学環と共同でメディアリテラシー活動(2007年～2009年の3か年企画)「ろっぼんプロジェクト(放送局と市民の協働的メデイ

アリテラシー活動の体系的構築」を行いました。この活動はテレビと社会の在り方を視聴者と一緒を考えるものでした。私はテレビ朝日側のプロジェクトの責任者としてこの活動を行った¹⁹のですが、3年度にまたがるこの活動には多くの社員が参加し視聴者と交流を重ねました。社員にとって、普段は視聴率という数字を通してしか知ることのなかった視聴者と、生身の人間同士として直接触れ合うことのできる貴重な機会となりました。

その中で生まれたワークショップが「テレビ・パズル」です。

「ろっぽんプロジェクト」の研究の中では、年齢も職業も人生の背景・経験も異なる数人のグループが、どうやって境界線・枠を超えて、テレビについて、打ち解けて話ができるのか、検討しました。元々、アカデミズム・テレビ局員・一般の市民の協働的メディアリテラシーというトライアングルのような組み合わせですから、どうすれば壁を取っ払えるのか…。その結果、生まれたのが「テレビ・パズル」でした。いきなり、テレビとは何か、という大げさなことは話せないのは当たり前。参加者ひとりひとりがテレビについての思い出や、好きなテレビ番組、テレビといえば…と思いつくものなど、それぞれ画に描いてグループ内で発表しあうのです。紙と鉛筆があり、テレビを見たことがある人ならば、誰でも参加できる気安さがあり、「画が下手だ、上手い」で盛り上がり、好きな番組が同じだったりしてグループの参加者がすぐ打ち解けるきっかけとなりました。そして、結果的にテレビへの理解が深まることになりました。²⁰この取り組みは、中央区・新宿区・千代田区などの多くの市民講座で行われました。

さて、本学でのメディア論はテレビに特化することはできません。そこで「テレビ・パズル」の変形版「メディア・パズル」を考えました。

(2) 「メディア・パズル・2019」

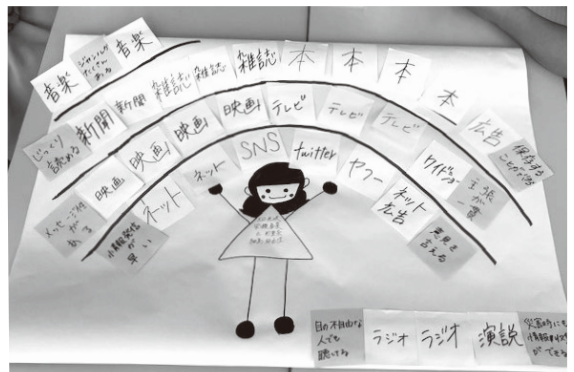
2019年度。授業がある程度進んで学生がそれぞれのメディアの成り立ちや歴史やメディアの違いなどを理解した所で、グループワークを行いました。グループ分けした学生に思いつくメディアを7つ挙げてもらいグループ内で話し合っ、模造紙の上で自分とメディアの距離を図として表現してもらうことにしました。情報を出し合い、整理し、構成し、表現する流れです。これを「メディア・パズル」と称したのです。

メディア7つ、と言って思いつくものは…。学生たちは思い思いに、「自分に情報を伝えてくれたもの」をあげていきます。新聞・テレビ・ラジオ・ネット・本・映画・書店のポップ・街中の電光掲示板・駅の電車遅延放送e t c。ある学生は、本屋でアルバイトをしていて、本の魅力を伝えたいとポップを書いたそうです。「何かを伝えるためのメディアですね!」と嬉しそうに挙げていました。

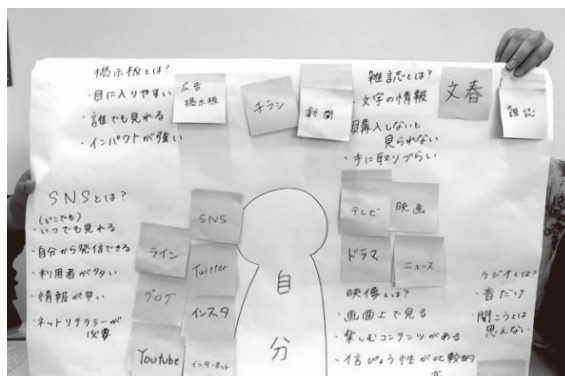
数名のほぼ初対面の学生同士がめいめいの意見を出し合い、メディアの特徴を整理して、メディアと自分の関係を図にしたのですが、1時間の間に大変明確な図ができあがりました。

単純な様に見えてきちんと話し合った跡があり工夫もあり、私自身予想外の出来でした。

ご覧いただければ、ネットが彼らの生活の中心に



2019年度 7つのメディア①



2019年度 7つのメディア②

なっていることがわかります。メディアとの距離感も、成程、という感じで、さすがネット世代。本よりテレビよりネットが自分の近くにあります。

小さくて見えにくいのですが、自分を表す丸印の中にSNSが入り込んでいるグループもありました。

かつて担当していた「放送番組論」の講座でもグループワークを行いました。今回はまとめる速度の速さが数段上です。割り切りの良さも感じました。ミレニアル世代よりもZ世代の方が情報の整理能力が高いのでしょうか。

2019年度はこれに加えて、自分たちで企画し、取材し、構成し、発表するという番組制作を行いました。湘北短期大学ニュースという楽しい3分間ニュースができ、その様子をVTRで収録し、みんなで鑑賞し大満足の時間でした。

(3) 「メディア・パズル・2020」

2020年度はリモートワークの中で、しかも、ひとりひとり通信状況や、ハードの状況が異なる中



(小さくて見えにくいのですが…)自分の丸の中にSNSが…。

では、「メディア・パズル」も「番組制作」も難しいと判断。しかし、せめて何かグループワークをして、自分の言葉で自分なりのメディアに

対する考え方を話してほしい、と思い、模造紙なしの「メディア・パズル」を行いました。オンライン授業も終盤の頃です。

グループ分けはZoomの機能に任せ、グループの中で7つのメディアをあげて特徴をまとめてもらいました。話し合う時間は30分、まとめに20分、この短い時間で数人が話し合うのです。そして、各グループ5分以内で発表です。

メディアへの理解が深まった時期だったのでしょうか。オンラインでのグループごとの発表の仕方にも工夫が見られ、他グループの意見にも熱心に耳を傾けている様子うかがえました。映像で記録できませんでしたので、私がメモしたあるグループの発表です。

.....

「メディアを7つ挙げると≪①テレビ②ラジオ③新聞④雑誌(①～④はマスメディア)⑤インターネット⑥広告⑦SNS≫です。その特徴は…。それに対し、私たち若者の同年代の人が重要としているメディアは≪①SNS②インターネット③テレビ④雑誌⑤広告⑥新聞⑦ラジオ≫です」

.....

このグループは単にメディアを列挙し特徴をあげるのではなく、それをきちんと順位付けし、「一般的には…。しかし、若者にとっては…。」と、自分たちの価値基準が上の世代と違うことを意識していることを明快に発表したのです。成程、Z世代です。

5. 授業が進む中で～オンライン授業への違和感～

時系列から言えば時間が戻りますが、私の葛藤を記します。オンライン授業で始まった講座。「教えるとは、伝えるとは何だろうか」を考えさせられた前期でした。

人はまず、同じ時間に同じ空間にいる相手と、視線で、しぐさで、声で、言葉で、何かを伝えようとします。言葉が生まれ、文字ができ、紙を媒体として、離れた場所への連絡が可能になっていきます。やがて、電信が活用され、音が、映像が、そして音と映像が、離れた場所へ届くようになり、一方向だった伝達も双方向になり、遠く離れた場所とのコミュニケーションが可能になりました。

しかし、2020年の春。インターネット時代になったとはいえ、一般の人々が完璧に双方向のコミュニケーションが取れるまでには至っていないのが日本の通信事情でした。オンライン授業の第一の課題は「ハード」にあり、それが「教えるとは何か」を私に突きつけることになりました。何しろ自分が誰に教えているのか、さっぱりわからない状態で授業が始まったのですから！

課題1 動画が見せられない！

メディア論を講義するのに、オンライン授業では動画を見せながら授業をすることができませんでした。学生の通信環境はバラバラで、受講しているすべての学生が等しく映像を鮮明かつ安定的にみることはできませんでした。音声でさえひずむことがあり、映像に至ってはまったくダメでした。教育の機会均等に関わる問題発生です。同じクラスの中で不公平があってははいけません。

Zoom画面上で均一に割り振られた学生たち。でも、通信環境はバラバラで教室の中で保障されている「平等感」はまったくなかったのです。(教務課からは、動画を見せられる方法を教えて頂きましたが、私のクラスの通信事情のバラバラさ加減を考えるととてもとても無理でした。)

動画共有サービスYouTubeが大好きな学生たちに対し、授業の場となると、みなが同じ状況ではないことを理解してもらう必要もありました。世の中の流れと逆行するようでしたが、私はオン



Zoomでの2020リモート授業。
「誰が誰だか、さっぱりわからない！」顔がきちんと映っているのは私の窓だけです。「顔出し」している学生も、ちゃんと画面に入っていなかったり…。加工する必要もなさそうです。

ライン授業では、一切、動画配信をせず、教室で一堂に会した対面授業の際に動画を見せ解説をしました。

課題2 相手の理解度がわからない！

何よりつらかったのが、教える側に必須の学生の理解度に合わせ授業を進めることが難しかったのです。教室での授業では学生一人一人の顔が見える。反応がわかる。いわば、自然に双方向の状況が作られています。Zoomは一応、双方向で会議ができるシステムですが、授業の中では実際には双方向とはいいがたい状況でした。

ビジネスの場面では会議の目的は明確で、例えばプロジェクトの目標についての共通認識があり、そもそも発言者はだれでその人がどのような意見を持っているか等の出席者に関する情報もあり会話を進めることはできます。

しかし、授業においては、なかなかそうもいかない状況でした。

課題2 (1) ～ 個人情報と「顔出し」問題 ～

Zoomの授業が始まる前に、私は教務課やオンライン授業の担当部署の方に、「Zoomで、自己紹

介など個人的な情報を聞き出して良いものか、また、顔出しをお願いしてよいものか」確認しました。

何を今更「個人的な情報を聞き出して良いものか」と思われる方も多いでしょう。今や、様々なイベントで、世界中の人とオンラインでつながって名乗り合い仲間になるのが常識となっています。そして、たいいてい場合は、その時間の中では参加者たちは顔出しで手など振りながら仲良く過ごすようになっています。

これまでの授業は、同じ空間で同じ時間の中で行われていました。しかし、同じ時間ではあるけれど、空間的には違う場所からオンラインで参加する場合、オンライン・通信という別の媒体に個人情報に乗せてもよいのだろうか、という、ごく単純素朴なことがふっと頭をよぎったのでした。

Zoomには一時期秘密保持に甘いところがあるというニュースもありましたが、授業開始の頃にはかなり改善された、と報じられ、多くの企業や学校が利用する一般的なサービスとなっていました。

しかし、過剰な心配のようですが、仕事上、個人情報の取り扱いにはいつも気を使っていますので、是非、教務課に確認したいと思ったのです。

また、私は学生の反応を見ながら、学生がどのあたりに興味を覚えるのか、取り上げるエピソードなどを変えています。そのため、「顔出し」をお願いしたいと考えたわけですが、家の中からの参加の学生さんの場合、家の様子を見られるのは嫌なのではないか、だから「顔出し」をお願いするのも難しいのではないかと思ったのです。それについてはZoomの機能でカバーできるということもあり、学生には「顔出し」するよう大学としても指導しているし、また、学生の方が機能をうまく使いこなしているので大丈夫です、という事でした。

そこで、安心して、学生に「顔出し」をお願い

することにしました。

最初の3回ぐらいは「皆さんの反応を見ながら授業を進めたいので」と軽く、4、5回目にはかなり強い調子でお願いしました。3回目まで全く顔を出さない学生がいたので、その後、2回かなり強い調子で顔出しをお願いし「事情があって顔出しができない場合は考慮するから、事前にその旨を伝えてほしい」と申し添えました。理解度を見ながら授業を進めたい、ということに加え、上記したように授業で行ういくつかのグループ作業のために必須だったからです。それでも「顔出し」をしない人もいましたので、注意することはなくなりました。

課題2(2)～表情がさっぱりわからない!～

ところが、実際、授業が始まってみると、オンライン上で画面に顔が出ていようがいまいが、それぞれのカメラの解像度や通信上の問題で、鮮明に顔を判別、認識できることが難しく、誰が誰だかさっぱりわからないまま授業を進めざるをえませんでした。

その上、授業をしながら、分割された画面上のすべての学生の表情を読み取ることも事実上不可能でした。

しかし、それ以前に、パソコンにカメラがなかったり、スマホが壊れていたり「顔出し」で授業を受けることができなかった学生がいたり、さらに「顔出し」で授業を受けることにためらいを覚える学生もいて、オンライン授業中は顔を見せずに受講した学生さえおりました。

授業後、教室で提出してもらったりアクションペーパーの代わり、メールで授業の感想及びその都度のテーマに対する各自の意見を送ってもらいました。授業を重ねるに従い学生の関心の持ち方がわかるようになりましたが、肝心の誰(つまり、どの顔の人)がどのような意見を持っているのかは、さっぱりわからないまま授業は半分ぐらい進

みました。

「誰かをその人と認識して人間関係を作る」という基本になかなかどり着かないもどかしさ。まさかメディア論の中でこんな基礎的なところで躓くとは！格闘の日々でした。

課題3 便利なようで困った「チャット」

学生の自宅の通信環境については、毎回必ず誰かしらが、回線状況が不安定だったり、スマホの調子が悪かったり、「先生に指名されたけれどマイクの調子が悪くて返事できませんでした」などの不具合が生じました。場合によっては、チャットで情報を送ってくる学生もあり、授業の内容以外の「スマホが壊れた」「今、工事の人が家にいるので顔だしできない」「就活試験がおわって、パソコンのある自宅に戻っている最中です」など送られてきて、授業を行いながら、それぞれに返信するなど落ち着かない感じでした。

しかし、一方で、自分が主催者でなく招待者として参加している場合は、自分の状態を伝えるにはチャットしかないことを考えれば、これがZoom利用の現在だと思えば致し方ないことなのかもしれません。助かったこともありました。私のいる場所の通信状況が不安定だった時、学生たちがその状況をチャットで素早く伝えてくれたのでした。

課題4 時間は共有できても、空間も空気も共有できない！

私が痛感したオンライン授業の最大の欠点は、「時間は共有できても空間は共有できない」という事でした。例えば、Aさんが、BさんとCさんに「私の話を理解しましたか」と聞く。Bさんは「理解しました」と返答するもの、Aさんに視線を合わせず、下を向いたままだったり自信なげな様子だったりすると、AさんはBさんが本当に「理

解したのか」判断ができない状況であることに気が付く。Cさんは「今一つ、理解できません」と返答するが、笑顔の返答ぶりを見れば実は「理解している」ことがわかり、「さらに理解をふかめたい」という様子がうかがえる。また、AさんBさんCさんというグループには、そのグループなりの雰囲気というもの生まれる…。

言葉には言外の意味もあり、空間を共にしてこそ、相手の状況を把握できる場合があることをあらためて痛感した時間でした。

という訳で、オンライン授業では、教室のように一人一人の顔がわかって、表情をみながら、何に反応するのか、ちゃんと理解しているのかを確認しながら、授業を進めることができなかったため、毎回通信がつながるかどうかがひやひやしながら授業がスタートし「結局、今回は誰が誰だかわからないまま授業をしたな」と疲労困憊して授業が終わる日々でした。

…もちろん、コロナ禍で一堂に会するのが難しい中、やむを得ない選択だったことは間違いありませんでしたし、Zoomの良さを生かして、何百人という受講生と直につながった感覚をもって授業を進めた先生もいたようですが…。

6. 待ちに待った対面授業 ～動画を見せた！歴史を学んだ！～

オンライン講義と2回のグループワークでの授業のあと、8月8日と12日各2コマずつ、対面授業を行えることになりました。対面授業を決断した大学当局、教務課の皆さんは大変だったと思います。対面授業では換気を重視し、大教室に20人弱で行いました。教室の定員に対し、5分の一ぐらいの人数だったと思います。

学生は、久しぶりの構内、久しぶりの友人たち

に大はしゃぎ。予め授業の資料を間隔をあけて机の上に置いておいても友達同士くっついてしまい、クスクスクス。本当に楽しそうでした。「はい、ソーシャルディスタンスを取ってね！」と何回も注意しました。

私にとっては、視聴覚教室で動画を思う存分見せられたことで今までの胸のつかえが降りたような気がした対面授業でした。「人類が初めて月に一歩をしるした映像」「テレビのニュースができるまで」「3.11で津波を撮影したカメラマンのドキュメンタリー」などの映像を上映しました。映像に合わせ、アナウンサーの原稿を読む実習もしました。

そして、例年、夏休みで終戦記念日に関するテーマをジャストタイムで教えることができませんでしたが、2020年は授業開始が遅かったために、終戦記念日の直前にメディア史の中でも大切な『玉音放送』について教えることができました。

メディア（媒体、そしてジャーナリズム）にはたくさんの役割がありますが、歴史を伝えることも大切な使命です。

お盆と重なる終戦記念日は日本人にとって大切な日で、毎年この日は日本中が家族と共に戦争と平和を考え、昭和史を振り返る日となっています。この時期に新聞やテレビ、ラジオ、映画、出版物は終戦に関する企画を送り出してきました。いわゆる「戦争もの」です。

2020年は75回目の終戦記念日でしたが、コロナ過にあっては、新聞もテレビも終戦記念日にふさわしい取材をしようにも思うに任せない、という状況でした。しかし、亡くなった方を悼み、戦争と平和について考える大切な日であることに変わりありません。

例えば、NHKの朝の連続テレビ小説『エール』。連続テレビ小説では珍しい戦地での戦闘シーンが放送されました。コロナの感染拡大防止のため取

録がストップし、放送が再開されたのは秋からでした。戦闘シーンは、おそらく戦後75年の終戦記念日前後に放送を予定されていたものと思われますが、収録延期のためか戦闘シーンは秋の放送となりました。それでも、この戦闘シーンの放送には大きな反響があったと言います。メディアが歴史を語り継ぐ役目を担っていることはコロナ禍であっても変わりはないのです。

さて、8月12日の授業では、『玉音放送』の原稿を学生と共に読みました。原稿は旧仮名遣いで難しい言葉が続きすらすら読めるわけではないのですが、一度でも声に出して読めば、言葉が体に入ります。

『玉音放送』²¹は、天皇の声を放送したものであること。その『玉音放送』の原稿は内閣によって長い時間激しい議論の中で推敲を重ねられたこと、天皇の声はレコードに録音されたこと。そのレコード盤が戦争終結を阻止しようとした一団によって奪われそうになったこと。しかし無事、ラジオで放送されたこと…。

1945年8月15日の放送まで国民は天皇の声を聴くことがありませんでした。はじめて天皇が国民に直接語り掛けたのです。電波状況が悪く音が切れ切れで、難しい言葉遣いに、内容を理解できなかった人もいたそうです。しかし、「雲の上の存在の人の声」を自分たちの身近で聞くという体験は、当時の国民にとって特別な体験だったに違いありません。

『玉音放送』によって国民は終戦を知り、受け入れ、日本は方向転換したのです…。世界を変えた放送でした。ラジオが歴史を刻んだのでした。

「伝えるべきことを、伝わるように伝える」。それがメディアの最大の役割で、『玉音放送』はその象徴ともいえます。

そういえば、最初の授業の後に寄せてくれた感

2020年 コロナ禍で学生はメディアとどう付き合ったのか。

想の中に「先生、僕は、声はメディアだと思います」というものがあり、これを次の授業の冒頭で紹介すると「私はそんな風に考えられる人が羨ましい。それは、人がメディアということですか」と反応した学生がいました。「ラジオから聞こえてくる声、ラジオの親密性が好きになった」という学生もいました。たまたまではありますが、前期の授業の最後の日に、「声」をめぐってのストーリーが完結したような気がしたものです。

私にとっては、21世紀生まれの学生と一緒に、天皇の言葉がラジオから流れた意味を考えられたことは貴重な機会となりました。換気のために窓を開け放ち、8月の熱風が吹き込む暑い教室で、忘れられない体験となりました。

7. 期末試験～良かったような、私の力不足だったような～

期末試験はレポートです。

課題1は「他己紹介」ならぬ「自己紹介」。

1分相当で自分を表現する文章…を記してもら



2020年8月は酷暑でした。対面授業で広い視聴覚室で映像を上映しています。学生はマスクをつけ3人席に一人ずつ座り、ソーシャルディスタンスを取った上で、換気のため窓を開けました。カーテンが外からの熱風であおられています。

いました。自己紹介は社会に出ればつきまといます。就職試験でも必須です。自分を知らない人に、自分をいかに表現すれば人に自分を理解してもらえるのか、考えてもらいました。

学期の半ばで行ったオンラインでの「他己紹介」では、みな芳しくなかったのですが、今回はなかなか素敵な仕上がりでした。自粛期間にもかかわらず、いきいきと学生生活を送る魅力的な姿がいくつも浮かび上がっていました。

課題2は「7つのメディアをあげ、その特徴を記しなさい」です。

これには私は驚きました。

Twitter・YouTube・Instagram・Facebook・LINE など。これらを一つ一つ異なるメディアと思い、その特徴を極めて詳細に記述した学生がほぼ半分でした。

私は授業で、これらはすべて「インターネットという通信回線上で（通信回線というハードを利用して）提供される交流サービス」であり、文字通り「ソーシャル・ネットワーク・サービスである」と繰り返し説明したのですが、学生たちにとっては、そのサービスの一つ一つが新聞やテレビなどと同等の「メディア」なのです。

私の教え方が違っていったのか、頭を抱えた事態でした。私の力不足です。大反省です。

課題3は「コロナ禍であなたはどのようにメディアと付き合いましたか」という設問です。

繰り返しになりますが、付き合い合ったメディアの筆頭はSNSでした。以下、学生のレポートを紹介していきます。

「もし、現代のようにメディアが発達してる時代ではない大昔にコロナウイルスが流行していたら人間はどのように情報収集をしたのだろうかという事を何回も考えました。手紙など文字に起こし

て伝達するにしても、距離的問題や時間的問題で最新の情報を得るのは困難だろう。そう考えると、コロナウイルスの拡大は、リアルタイムで情報を得られる今の時代でまだマシだったのだろうか」

SNS時代を肯定する意見の一方、こんな意見もありました。夏になっても、多くの学生が木村さんの死を悼み、事件の影を引きずっていました。「コロナ禍で外出もできず鬱々とした気持ちで過ごす人が多いことはSNSを見ていれば簡単にわかる。人々はその鬱々とした気持ちを他人に向け始めたのだ。その代名詞と言ってもいいであろう社会現象が誹謗中傷である。TwitterをはじめとしたSNSで芸能人が誹謗中傷に会い、自らその尊い命を絶ったというニュースは有名だ。自分のストレスを顔が見えないからと言って、他人にぶつけて追いやるようなことはしてはならないのだ。私はコロナ禍において、メディアの使い方や情報の見極め方について大きく見直すべきだと考えている。」というもの。

また、テレビとSNSを比較するものも多くありました。「テレビのニュースを見るよりもスマホの方が自分の知りたいときに情報を得られるため、デジタルメディアに頼ってしまうのだと考える」という意見がある一方、「コロナ期間中に私が多く利用したメディア媒体はSNSとテレビで、SNSはいち早く情報を知ることができる。しかし、それが本当の情報なのかかわからないのでテレビのニュースを見ながら事実確認を行いながら自分の知識としてとりいれていった。」

テレビとSNSの併用が当たり前の世代も、コロナ禍で、あらためてそれぞれの特徴を考えたようです。

“フィルターバブル（自分の見たいものだけ見てすごしてしまう泡）”の中に閉じこもってしまう傾向がある、と言われる若い世代が、コロナ禍

という現実に向き合うために、バブルの中から一歩足を踏み出す様子も見てとれます。「テレビでは緊急事態宣言といった大事なことを多くの国民に伝えることができる点について一番の確実性と真実性があるという特徴があります」

「今の日本はどのような危機的状況にあるのか、感染拡大はどの程度進んでいるのか、経済活動にどのような影響があるのかなど、以前よりしっかりニュースを見るようになった。ニュースを見るようになり感じたのは、テレビは『必要な情報をだれにもわかりやすいように放映している』ということだ。テレビは一家に一台ある、と言っても過言ではなく、見る人の年齢、性別、国籍は数知れない。そうしたメディアであるからこそ、大衆に向けた内容、編集になっておりストレスを感じることなく見ることができた。」

コロナ禍をきっかけに、テレビというメディアへ信頼を寄せたことがわかります。

こんな興味深い意見もありました。

「感染症に関する報道の失敗が多数存在すると思います。その一つとして感染症に関するニュースの『構造』、平たく言えば、画面構成や映像の作り方が、初期段階において「平時のニュース」と全く同じだったことである。その理由として国内初の感染者が出てから2カ月以上たって初めて各番組がsocial distancing（社会的距離を取る）に対応するとともに、収録が困難な番組の放送が休止されるなど、目に見えた影響が表れてきましたが、しかしながら、視聴者に危機感を抱かせたのであれば、初期段階における対応が諸外国の番組作りと比して不十分であった。あまりにも『いつも通り』すぎる対応であったのではないかと感じました。」まるで、番組制作者のようにテレビを観察する視点はとて2年生とは思えない鋭いものです。

世間では、「日本は外国に比べて感染者も少な

く亡くなった方も少ないのに、テレビがコロナの危機をあおりすぎではないか」という指摘もあったのですが、この学生は、むしろテレビには「さらに高い危機意識を持つよう」「国民のお手本であること」を期待していました。

そして、巧みにメディアを使いこなした経験を書いてくれた学生もいます。アルバイト先の飲食店が閉じてしまってアルバイト代が得られなくなったというある学生は、ニュースで「アルバイト代が減少した学生のための学生支援緊急給付金」があるのを知り申請。給付金をもらうことができたそうです。この学生は、ニュースをこまめにチェックしていました。興味深かったのは次の言葉です。

「この話を友人にしたところ、みんなこの制度を知らない様で同世代の人はニュースを見ないことがわかりました。情報を知らないと損をしてしまうことを感じました」

感染予防も含め、生活のために情報を得ることの大切さを痛感したことがうかがえます。

また、別の学生は、「オンラインでの授業や就職活動を実際に受けてみて、やはり人と人は実際に会って目を見て話すことが大切なコミュニケーションの基本だ」という事を改めて実感した。コロナ禍でコミュニケーションの在り方やメディアとの付き合い方を考え直すきっかけになり、とても勉強になった」としています。

どちらかと言えば、社会学的、ジャーナリズムの側面から語られる事の多いメディアですが、2020年の前期は、この学生のように生活実感の延長線上にメディアをとらえた学生が多かったと思います。

8. 授業に対する学生たちの感想 ～「顔出し」問題について考えてみた～

さて、無事に前期の授業が終わったわけですが、以下に、教務課が行ったオンライン授業の取り組みに関するアンケートの学生の感想をそのまま転載します。好評もあれば、厳しいものもありますが、誤字も含め彼らの表現・言葉こそ実態をありのままに映すものと考えます。

◇オンライン授業では資料の配布だけでしたが、最後の授業では動画を見ることができ、より理解が深まりました。

◇資料が文字が小さくて読みづらかったです。

◇グループワークなどもあったのしいことありましたが、少しは難しい話が多く理解するのが大変でした。

◇生徒の理解度に合わせて授業が進められているように感じました。先生も慣れないオンライン授業だったと思いますが、丁寧な説明でわかりやすかったです。

◇グループワークのようなものを使った授業もあったのでとてもよかったです。

◇顔出しを強要する姿勢以外は概ね満足できました。

◇他己紹介がとても面白かったです。ありがとうございました。

◇私はメディアについての知識が浅く、知らないことが多かったのですが、メディアとは何かという事から始まり、各メディアの特徴や歴史を学ぶことが出来て満足しました。オンライン授業で不具合や不便なところもありましたが、授業として内容の充実したものだだったので満足しました。

◇資料を読むことが多かったのですが、授業のような空気がない為、他の人が読んでいる時は暇になってしまう時間が多く感じました。

◇Zoomによるグループ分けなどZoomのシステムがおぼついていて時間がかかってしまう所

などがあった。

私の Zoom の操作が未熟であったこと、資料を共有してもスマホで読む人には読みづらかったこと、また、オンライン上でもグループワークは楽しかった！という事が良くわかる感想です。

しかし、一点。「顔出しを強要する姿勢以外は概ね満足できました。」に関しては、どうしても妙にひっかかるものがあり、感想をもらった後、しばらく…3カ月ほど、考えこんでしまいました。「顔出しを強要する姿勢」とあるので、私が高圧的に「顔出し」を要求したかのように受け取られますが、果たして「強要した」のか…。教師と学生の力関係の中で「お願いした」のがそう取られてしまったのかな、と、自分の言葉を反省する必要はありそうです。

しかし、問題の本質はどうやらそこにはない、と、はた、と気が付きました。

「さて、よ」です。

普通の授業では、つまり、教室では皆、「顔を出して」います。身体丸ごと参加していますが、「教室に行くのは顔を出すことになるから、いやだ」とは誰も言いません。それなのに、なぜ、この学生はオンラインでは「顔出し」はいやなのだろうか？ 不可解です。更に考えてみました。

教室では「体ごと授業に参加する」「自分の顔をみんなに見せている」。それはやむを得ない。

しかし、Zoom では画面上に均一分割された中にカメラで撮られた顔が割り振られます。ひょっとして、そういう参加の仕方そのものが嫌なのではないか、と思に至りました。

その背景の一つ目。

どうやら「教室の中の自己表現」の問題がありそうです。教室では、前の方の席、教師に近い席には意欲のある学生が座ります。そして、後ろの方や目立たない席にはこっそり内職をしようとす

る学生や、とりあえず参加してみるか、という学生が座るのは、古今東西、世界中たぶん同じようなものです。空間の中のどこに自分を位置するのか、が、一種の「自己表現」なのです。意欲ある学生は、体全体で「発言可能！」のサインを送り、「とりあえず参加」の学生はなるべく気配を消して…忍びの者のように…存在感を薄くするのが、わかります。教室という定められた空間で、身体エネルギーをどうコントロールするのか、積極的であれ消極的であれ、一種の「自己表現」なのです。

しかし、この身体の発するサインがまったくわからないのがオンラインなのです。この学生は、教室の中での「自己表現」の機会を奪われてしまったことへの抵抗を、感想に寄せたのかもしれない。

この感想のおかげで「学業には、空間と時間を共有する身体的側面がある」ということをあらためて認識することができました。

さて、二つ目です。

この学生は「『顔出し』で意見を言う怖さ」を感じたのではないか、という推測です。

前期の授業中、学生は皆、インターネットの暴力に異常なまでに敏感でした。テレビの討論番組を見て「顔出しで意見が言えるなんてすごい」という世代です。「意見を言えば、叩かれる」。意図して炎上するような発言をしたわけではないのに、叩かれてしまう…そんな SNS 上の怖さをオンライン授業にも重ねてしまったのかもしれない。

私は、授業では必ず「あなたの意見は？ 感想は？」と声に出して自分の考えを述べるよう、促します。「前の人の発言と同じです、とあなたは言うかもしれませんが、同じようであっても、違うかもしれない…。あなたの言葉にはあなたにしか表現できないものがあるかもしれません。自信をもって自分の言葉で話してください」と。まさ

に「自分の意見を自分の言葉で言えるように」という講座の目的に沿った実践ですが、それでさえ怖かったのかもしれない。

前述したように、私はミレニアル世代を教えた時期があります。通年の講座でしたが、春には、人前で声を出すのも怖いと言っていた学生が学年末には、自分の意見をみんなの前でしっかり述べるようになるようになっていました。嬉しいことでした。

しかし、5年間の講座で毎年、必ず数人から「私はこれまで人前で意見を言う事はありませんでした。でも、この授業では、最後になって言うことができるようになりました。元々、私の意見など誰も聞いてくれませんでしたし、何を言ったらいいか、わからなかったのです。みんなの前で話すことができて嬉しかったです」といった感想が寄せられました。

社会への参加意識が高いと言われていたミレニアル世代のはずですが、自分の言葉で語る機会が実は少なく、自分をどう表現すればいいのか、迷っている学生も多くいたのです。

私は学生の「元々、私の意見など誰も聞いてくれませんでした」という言葉の中に、疎外感や自己肯定感の低さを感じ、悲しい気持ちになりました。一見、幸せそうな学生たちですが、自分の言葉を受け止めてもらえる場がなかったのでしょうか。私の講座は、リーマンショックや東日本大震災など、日本が困難を抱えた時期でした。彼らの親御さんたちも世の中も生きるのに必死で余裕がない時代だったのかもしれませんが、将来を担う若者たちが抱える寂しさに、暗澹たる思いを抱かざるを得なかったのです。

それからずいぶん時間が流れましたが、果たしてZ世代はしっかりと自分の言葉を述べる機会をもっているのでしょうか。

人々は、インターネットの普及によって自由に

発信するツールを得ました。「個人がメディアだ」という YouTuber もいます。

しかし、LINE でのおしゃべりやメールのやり取りは断片的なものです。Twitter の投稿は日本では 140 文字という約束があります。簡潔に意見をまとめるにはふさわしい文字数ですが、ディテールを表現するには限度があります。果たして、人々は、きちんと自分の言葉を発しているのでしょうか。

そして、インターネット上では「モノ言え叩かれる」状況が加速しています。うかつなことは言えない、と首をすくめ臆病になるのもわかります。たわいない発言が誤解され、炎上し、身元まで明らかにされ、インターネット上に誹謗中傷が延々と残り続ける恐怖。「いいね」を押したり「リツイート」はするけれど、「顔出しで、実名で、自分の意見は言いたくない」のかもしれない。

この学生は、ひょっとしたら、オンライン授業というインターネットの世界での「顔出し」を生理的に嫌がったのかもしれない。私は、「顔出し」を嫌がる背景には、元々、自分の言葉を語る習慣がない上に、何か言えば否定されるのではないのか、という恐れを感じた学生の戸惑いがあるのではないのか、と、思うに至りました。

この学生はアンケートを「概ね満足でした」とまとめています。この感想に、私も「良かったな」と素直に思いました。

SNS を使いこなす Z 世代の中にある「SNS への潜在的な恐怖感」。歴史上、時代とともに様々なメディアが出現しましたが、新しいメディアが社会定着するまでには最適な利用方法をめぐって試行錯誤や、受け入れ態勢の確立などに時間がかかっています。インターネットもまた同じですが、その訴求力・爆発的な浸透力はこれまでのメディアの比ではなく、若者が容赦なく試行錯誤の荒波に放り込まれていると感じました。

9. 授業の最後に ～幸せな社会とは？～

人を幸福にするのは「良い人間関係を築くこと」。これは、アメリカのハーバード大学の成人発達研究が80年にわたって成人を追跡した研究結果²²です。若い頃は名声やお金などの成功を望む人は多いのですが、本当に幸せになるためには、良い人間関係を築くことが大切なのだそうです。

幸福を感じる時、それは「何でも言いたいことを言い合い、時にけんかはするけれど、いざという時には助けてくれる人、信頼できる人が身近にいる時」なのだそうです。その人は、家族でも、夫婦でも、恋人でも、友人でも、近所の人でも構いません。

例えば、母親は乳児を抱いて幸せを感じることは確かですが、母親は乳児を保護することはできません。むしろ、乳児を守ろうと不安を覚えるかもしれないのです。むしろ、他人であろうと「言いたい事を言い合い、いざという時には助けてくれる信頼できる人」と一緒にいることが一番安心で、幸せなのだそうです。

それはつまり、「何でも言いたいことを言い合い、意見の対立はあっても助け合える」ことが、生きる上で、社会生活の中で大切なことなのだ、私は思いました。

ミレニアル世代の教え子たちの何人かは「元々、私の話なんか誰も聞いてくれない」と言っていました。本当に悲しいことです。

Z世代の教え子たちは、生まれながらSNSの便利さを享受する一方、自ら声を発することをためらってしまっています。これは幸せな事でしょうか。

授業全般を振り返ると、Z世代の若者たちは、フィルターバブルから出て情報収集をするなど、試行錯誤して「受け手としてのメディアリテラ

シー」を身に着けていることがわかりました。コロナ禍が彼らを賢く成長させたのです。

しかし、自らの意見を発信する「送り手としてのメディアリテラシー」はこれからの課題です。それは、彼らの課題でもあり、社会の課題でもあります。

上記した東浩紀さんは、2010年からの10年間でこんな風になっています。

「SNSと民主主義が結びつくことには良い面が多くありました。けれども負の面もあった。その2面性が明らかになった10年でした²³」。SNSの力を認めた上で、SNSがもたらす政治的な分断や利根的な“批判のための批判”で起きる炎上、民主主義を損なってしまったのではないかと考察するのです。

小学5年生の時に『玉音放送』を聞いたジャーナリストの田原総一朗さん(86歳)は深夜の討論番組『朝まで生テレビ!』の司会を務めています。が、「モノを言えない時代があったから戦争が起きた。だから言論の自由は絶対守らなくてはいけない」といつも言っています。

言論の自由や民主主義などと大上段に構えなくても、「言いたい事を言い合い、けんかしても助け合っていける」そんな仲間と共に生きるのが幸せな社会なのではないでしょうか。

学生が素直に言葉を発することができるように、私たち大人も考えていかななくてはならない、と思いました。

最後に、私は学生に2つの言葉を送りました。情報拡散の例として授業でも折に触れ伝えた妖怪“アマビエ”²⁴と、「時間」についてです。

2020年の新語が一気に広まった例としては「新型コロナウイルス」が筆頭でした。現代用語の基礎知識・2020新語流行語大賞は「3密」でした。京都の清水寺の住職の書くその年の一文字も



* 『肥後国海中の怪(アマビエの図)』弘化3年(1846年)。(京都大学附属図書館所蔵)

* 2020年6月4日JR五反田駅。ドイツ語で人々を応援する『アマビエ』のポスター。

「密」。厄災に関する言葉が世間を席卷したのです。

しかし、それに対応するかのように人々は「疫病退散」の守り神を生み出しました。江戸時代の“アマビエ”が突如様々なメディアを通じて人々の生活に入ってきたのです。コロナ禍と闘う象徴として、人々の願いがひとつの個性となって可視化されたのです。きっかけがSNSだったということも2020年の妖怪らしい登場でした。

私は、“アマビエ”の例を引きながら、「現在、すべての人がみな等しくコロナ禍と闘っています。大変な思いをしているのは、あなた一人ではなく、日本だけでなく、世界中の老若男女がこの厄災と向かい合っています。北半球の人も南半球の人も、みんなが同じように苦しさを乗り越えようとするのを忘れずに頑張ってください」と伝えました。

そして、もう一つ。

「皆さんは男の子も女の子も若くて、みんな綺麗でピカピカしています。夢も希望も未来があり輝いています。でも、年をとるのも、悪いことではありません。経験を重ねれば色々なことが見えてきます。歳と共に人生の財産が増えて、時間と共に人生が豊かになるのです。『若いのは楽しい、歳をとるのは嬉しい』です。今は若さを楽しみな

がら、歳をとると楽しくなるという事を忘れずにいてくださいね。」と。

私はテレビ局に長く身を置く者として、授業の最後に、学生に「時間」について伝えたかったのです。テレビは、「音と映像と時間のメディア」です。テレビには編成表があり、番組は定時に始まり定時に終わります。決められた時間軸とその時間量の中で、何が伝えられるか考え、特に生放送の場合は、視聴者と共にその時間を共有します。時間はだれにとっても平等です。「その時を楽しむ。でも時間は流れ去る。しかし、共有した時間は財産となって人を豊かにする」と、私は伝えたかったのです。

本稿の締め切りは、2021年1月15日です。ちょうど一年前に日本で初めて「新型コロナウイルス感染症」の感染者が確認されました。この一年間で、世界も日本も大きく変わりましたが、この時間の中で私たちは何を得たのでしょうか。

本稿は「学生を取り巻くメディア環境」が主軸でしたので、私の本務について直接触れることはありませんでしたが、私の場合も他の職業と同じように番組制作の現場で「感染予防」が最大の任

務であったことは間違いありません。また、人々が不安な中、番組が社会に不安を与えてもいけません。細心の注意を払いながら、そして、ソーシャルディスタンスを取りながらの番組制作は骨の折れる作業でしたが、私自身が学生に伝えたように、「みんなが等しくコロナ禍と戦った」一年でした。

放送の「送り手」も、視聴者という「受け手」も「同じ思い同じ大変さを共有し共に戦った時間」でした。この共有した時間こそが、次の時代を切り開くバネとなると考えます。

ミレニアル世代の教え子たちは今、おそらく社会の最前線として、自分の生活を守るために日々格闘しているはずです。

20歳でさらに厳しい洗礼を受けたZ世代の教え子たち…。レポートで「私たちは共にコロナと戦っているのだから、ネットいじめなんかしている場合ではないはずです」高らかにそう宣言した学生の言葉が印象的なクラスでした。

刺激的な時期の考えさせられることの多い講座で、興味の幅の広い学生たちとの楽しい時間でした。担当させて頂いたことを感謝いたします。

謝辞

授業を行うにあたり、私の若き同僚、ミレニアム世代の手島敬さん、Z世代の横田昂大さんに協力して頂きました。上野敦史先生、兵頭潤さん、大槻裕志さんにもご指導頂きました。紀要ご担当の熊谷裕子さんには大変お世話になりました。御礼申し上げます。

注

- 1 本稿ではメディアを広義の「情報を伝達する媒体・機関」とします。
- 2 筆者はテレビ朝日報道局情報番組センターに在籍。2013年から『朝まで生テレビ!』プロデューサー。(番組概要) 司会：田原総一郎、進行：渡辺宜嗣・村上祐子。毎月月末最終金曜日深夜に放送中の

1987年開始の昭和・平成・令和をまたぐ討論番組。政治経済・天皇・憲法・安全保障・外交から原発・ジェンダー・メディア論等様々なテーマを扱い、ニッポンと日本人を論じている。

- 3 新型コロナ対応・民間臨時調査会資料：「新型コロナ対応民間臨時調査会 調査・検証報告書」一般財団法人アジア・パシフィック・イニシアチブ 2020年10月25日
- 4 後日談：この放送には後日賛否が分かれた。「プライベートに踏み込みすぎた、倫理的に問題がある」という指摘がある一方「感染症の恐ろしさを伝えた意味がある」というものである。
- 5 改正著作権法：改正著作権法第35条（2018年改正）は、「学校その他の教育機関」で「教育を担当する者」と「授業を受ける者」に対して、「授業の過程」で著作物を無許諾・無償で複製すること、無許諾・無償又は補償金で公衆送信（「授業目的公衆送信」）すること、無許諾・無償で公に伝達することを認めています。
- 6 総務省情報通信政策研究所研究部の調査：我が国の情報通信市場の実態と情報流通量の計量に関する調査研究結果（平成21年度）平成23年（2011年）8月 総務省情報通信政策研究所調査研究部
- 7 共立女子大学 文芸学部『放送番組論』（通年科目）を担当 2009年4月～2014年3月
- 8 事件のその後：政府は8月相次ぐネット中傷への対策として、被害者がSNS運営企業に投稿者の電話番号を請求できる省令改正を行った。特定電気通信役務提供者の損害賠償責任の制限及び発信者情報の開示に関する法律第4条第1項の発信者情報を定める省令の一部を改正する省令。12月17日には、ツイッターで木村さんの中傷する内容の投稿をしたとして、侮辱容疑で大阪府の20代男が書類送検された。
- 9 放送における言論・表現の自由を確保しつつ、視聴者の基本的人権を擁護するため、放送への苦情や放送倫理の問題に対応する、NHKと民放連によって設置された第三者の機関。主に、視聴者などから問題があると指摘された番組・放送を検証して、放送界全体、あるいは特定の局に意見や見解を伝え一般にも公表し放送界の自律と放送の質の向上を促す。
- 10 ブレイディみかこ著 2019年6月。Yahoo! ニュース・本屋大賞2019 ノンフィクション本大賞受賞。作者は英国ブライトン在住。地元の中学に通う息子の日常を通じて英国社会を描き、ロックな母と息子の成長を記した愉快的な「一生モノの

課題図書」。

- 11 トランプ大統領とSNSのその後：2021年1月トランプ大統領の支持者による国会議事堂占拠事件をめぐって、トランプ大統領がTwitter社の規則に違反したとして、Twitter社はトランプ大統領のアカウントを永久停止すると発表した。また、Facebookはかねてから、政治家の情報発信には公共性があるとしてきたが、事件を受けて「民主的に選ばれた政府への暴動を扇動することにサービスが利用されている」として、トランプ大統領のアカウントを無期限利用停止とした。
- 12 朝日新聞「風と共に去りぬ」配信停止 時代の風：2020年6月26日（朝刊 文化文芸欄）『風と共に去りぬ』 奴隷制を美化 黒人死亡事件で差別抗議 本編前に歴史的解説付け再配信 観客の視点変える？
- 13 同作品は『カメラを止めるな！』 上田慎一郎監督とキャストが再結集し、完成まで全員が一度も会わずに完全リモートで制作。ビデオ通話の画面録画とキャストのスマートフォンでの自撮り撮影で映像を集め、上田監督が編集して仕上げたという。
- 14 総務省情報通信白書の調査：総務省情報通信白書（平成26年版）インターネットリテラシーに関する利用者意識
6か国で国際ウェブアンケート調査を行ったところ、Twitterの利用者では日本は「匿名利用」が7割を超え、他国に比べても顕著に匿名利用が多い状況にあることが分かった。
- 15 YouTubeの中のANNnewsCHは、他局に先駆けて3月で100万人が登録。9月末には150万人を超える登録者数となった。
- 16 『令和元年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』令和2年9月 総務省情報通信政策研究所。メディアの重要度・信頼度調査。「いち早く世の中でできごとや動きを知る」ために一番利用するメディアは「インターネット」49.9%「テレビ」46.2%。「世の中でできごとや動きについて信頼できる情報を得る」ために利用するメディアは「テレビ」55.9%「インターネット」24.0%「新聞」16.7%。
- 17 「#Twitterトレンド大賞実行委員会」によるとランキングはツイート数やトレンド欄のクリック数などのデータを基に選定。2020年の1位は「コロナ」2位には「#検察庁法改正案に抗議します」3位に「緊急事態宣言」が入った。
- 18 『民放連 メディアリテラシー実践プロジェクト』2010年度報告書（2011年11月）
（社）日本民間放送連盟
- 19 東東京大学の責任者は水越伸東京大学大学院情報学環教授。水越教授はメルブラッツという他大学などの研究者との連携も行い、この活動には東京大学とテレビ朝日という枠を超えて様々な立場の人が参加した。テレビ朝日は広報局お客様フロント部が担当部署で、私は当時の部長として責任者として活動した。
- 20 本学でメディア論を統括しシラバスを監修する上野敦史講師は「ろっぽんプロジェクト」の中心メンバーとして多くの学校へ出前授業に赴き、各地の市民講座を運営。この活動は、上野講師がプロデューサーを務めるテレビ朝日の自己批評番組『はい！テレビ朝日です』（日曜午前5時放送）で随時、視聴者に報告が行われた。
- 21 『玉音放送』に至る一日を取材した『日本のいちばん長い日』 半藤一利著（文藝春秋）。…1965年初出。当初、大宅壮一編として刊行されベストセラーとなった。1995年半藤氏の著書として再出版され、今なお昭和の名著としてロングセラーとなっている。自らを“歴史探偵”と称した半藤氏は、2021年1月12日91歳で逝去された…この本を原作とし、東宝が1967年に、東宝35周年の記念作品として映画『日本のいちばん長い日』（岡本喜八監督）を制作し大ヒットとなった。その後、終戦記念日近くには恒例のように毎年テレビでも放映されてきた。2015年戦後70年の記念として『日本のいちばん長い日』（原田真人監督）を松竹が制作した。また、テレビ朝日『ザ・スクープスペシャル』2011年8月14日放送～『日本の一番長い日』の真実 誰も知らない“玉音放送”～（テレビ朝日・東京サウンドプロダクション制作 原一郎プロデューサー、MC：鳥越俊太郎・長野智子）は「メディアの観点から史実に迫った」として2011年度ギャラクシー賞奨励賞を受賞。
- 22 TED（Technology Entertainment Design）2015年12月23日。心理学者ロバート・ウオールディングー「人生を幸せにするのは何？もっとも長期にわたる幸福の研究から」他。これは今でもYouTube上にあり繰り返し視聴され多くの本などに引用されている。私はNHKのEテレの放送で視聴し、発達心理学の側面からも大きな感銘を受けた。
- 23 『ゲンロン戦記 「知の観客」を作る』（東浩紀著）中公新書クラレ2020年12月10日
- 24 江戸時代後期の瓦版に登場する“アマビエ”。長らく一部の妖怪好き以外には知られていなかったが、2020年2月SNSで「アマビエ・チャレンジ」がスタート。画家やイラストレーターが思い思い

の“アマビエ”を描き多くの人が知る所となり、新聞やテレビでも取り上げられ、『日曜美術館』～疫病をこえて 人は何を描いてきたか～（NHK Eテレ 4月22日放送）でも紹介された。この不思議で可愛い妖怪は、今やお菓子の意匠になったり高崎では達磨になったり、神社のお守りになったりと、疫病退散の守り神としてコロナ禍の日本社会のアイコンとなった。

My students and Media during the Coronavirus pandemic 2020

Yumiko SUZUKI

【abstract】

The Spring of 2020. With the spread of Coronavirus infection, people had to strive to cope with unprecedented circumstances which occurred one after another. They were confused by various information. The world had completely changed, compared with that of a year ago. The nationwide school closures, declaration of the state of emergency, introduction of online classes in the College. In the first half semester last year, I lectured on media theory for a class in this College. I felt it necessary to leave a real time record on how students in my class dealt with information from the media in that situation. I will look back on the thought and behavior of my students (the first half semester of 2020) regarding the media in terms of media studies. I hope that I could share the record and analysis with readers of this bulletin on which media the students accessed to, how the media affected the students, how the students made use of the media, and how the students changed as the lecture progressed.

【key words】

Media, TV, SNS, Freedom of speech, Generation Z

